

立岩：斉藤さん、ありがとうございました。

特に今日は、アフリカの話と障害者の話、一緒というか、そのつながりみたいなのをしゃべってもらいました。皆さんがどういう関心もたれているのかとかわかりませんが、両方のことに通じている人ってあんまり日本はいないはずで、この人が誰だみたいなのということも聞いていただいたら答えられる範囲で答えてもらえるだろうし、そういうごくごく具体的なところも含めて議論していきたいと思います。

その前に、聞きながら思った補足をちょっとします。僕らは生存学研究センターというセンターをやっていて、地域的にはもちろん日本の国内のことが多いんですけど、センターが始まったきっかけでもあったグローバル COE というのはとにかく世界でなんかしろみたいな、そういうことはやらなきゃいけないということはあったんです。やらなきゃいけないというだけではなくて、どういう形で関われるかなんかということは考えていました。

その時に、いわゆる欧米、ヨーロッパとか北米とかオーストラリアとか、そういうのはいろんな情報も入ってくるし、研究交流とかも盛んだから、それはいいやという感じがあったんです。そうすると残るのはどこかということになりますけれども、アジア、アフリカあと中南米とかですか。三つともやればそれはそれでけっこうなんだけれど、そんなお金もないし、手勢もないという感じで、アジアはやっぱり落とせないというか、韓国とか中国とか、そういう人たちと連携というか交流というか、そんなことをぼつぼつこの何年か、でも7年ぐらい、8年ぐらいやっています。

ではなんで中南米じゃなくてアフリカなのかというと、これはあまり説得的な答え出せないというか、ただアフリカはこれから重要だぞという感じははずいぶん前からしていたし、僕が斉藤さんを知っていたというか、アフリカ日本協議会のこと知っていてということもあったりしたんだと思います。今皆さんが手に持ってもらっているその報告書(新山編 [2015])の編者をしてあげている新山智基さんは、ここで博士論文書いて、それからそこにも書いていますけど、生存学研究センターの副センター長の小川さやかさんという人類学

者もアフリカのことをやっていて、この2人は現地に行っているんです。それはそれでけっこうなことかどうか、大変大切なことであるに決まっているわけです。他にもそういう人たちが出てくるといいなと思っているんですけど、斉藤さんはアフリカに行ったことがないアフリカ日本協議会事務局長という人なんです。僕も行きたいなという気持ちはあるんだけど、体というか、時間的にも無理だというのも目に見えていて、そうすると日本にいたまま何ができるかということを考えるんです。

それは、多分あるんです。今日も斉藤さん話してくれた中で言ってみれば、バックアップというんですかね、学者というのは、後ろにいて、後衛として働く、そういう仕事って、さきほども斉藤さん言っていたけれども、意外と大切に、前向いて走っている人たちはそこまで手が回らないということがけっこうある。その分、研究機関とか研究者とかがやれることはあるんじゃないかなというようなことは思ったりするんです。もちろん、それプラス、現地であるいは現地の人とどういうふうにとということと、組み合わせていくといい。

そういうことと関わりながら一つ、支援という領域、捉え方があります。支援っていいもんだという、それはいい、定義上いいものなわけです。ためになることをするというのが支援ですから。ただ、そこから考えなきゃいけないことはいくつかあるという話を斉藤さんはしたんだけど、僕もそういうのはちょっとクールに考えてみるというのは大切なことだと思っている。たとえばさっきの一番目にしゃべった話とも関係あるんですけど、現地に行って支援する、これはいいことだと思うわけです。だけど、これは日本から何十時間もかけてお金も払って、何かやって戻ってくる。往復する金もいるわけです。そういったことを考えてみると、そのお金があるんだったら、現地の人にその分お金出して働いてもらった方がいいじゃないか、そういう考え方もありうるわけです。

そうすると、支援ならいいというわけじゃなくて、どういうふうにもどういう形で支援というものをしていく方がいいのか。これはべつにアフリカの話だけではなくて、たとえば東北で震災がありましたけど、最初の数日とか数週間とか、場合によっては数カ月とか、とにかくするべき仕事のわりに人がいないわけだから、働ける人が誰でもでも行って、とにかくやれることをやるというの

がいいことかもしれない。ただひと段落ついたら、あとは現地の人に働いてもらって、その働いてもらうためのお金を出すとか、そういうふうにした方がいいかもしれないです。これは「かもしれない」なので、そうじゃないかもしれないんですけど。そんなことを考えるというのも、一つ研究としてはおもしろいというふうに思ったりします(cf. 立岩 [2015])。そういう意味で言うと、斉藤さんが紹介してくれた、こっちに誰か呼んでリーダーになってもらって、その人が現地戻って仕事することをバックアップするというのは、わりとお金の使い方としては効率的、そういうやり方があるのかなということも思うんです。

それに話をつなげていくと、さっき日本財団という財団の名前出ましたけど、この財団は昔からハンセン病に関する活動を昔からやったきたところがあって、伝染病とかそういうところに目を向けてきた財団でもあるので、関係あるかもしれません。そちらは僕はよく知りません。日本の場合で知っているところだと、もう30年以上前からダスキン、ミスター・ドーナツが日本のリーダー育成みたいな形で、アメリカとかそういうところに障害者を派遣するということが始まって〔公益財団法人ダスキン愛の輪基金により1981年に開始、当初の名称は「ミスタードーナツ障害者リーダー米国留学派遣」〕、今でも続いています。我々の院生にもその研修をしてきたのが何人かおられますし、僕と一緒に本を書いた安積純子であったり、それから障害学会という学会の最初の会長やった石川准もそうです。そういう意味で、なかなか成果は上がったとはいえる。ただ日本のリーダー派遣も最初は身の回りのことは自分でできる人みたいな条件があったんです。今はそれはとっばらわれていて、かなり重い人もそういったなんか援助する。まず簡単なところとか、できそうなところとか、そういうところから始まりました。そして、やがて日本への受け入れも始める。そういう海外からの受け入れは他の団体もやるようになっています。

すると、どこからどこに、何を伝えていくかということになります。アフリカで障害者のことこれからどうしていくかとなったとき、まず教育と労働という話になって、これは大変よくわかる話なんです。勉強して学歴をつけて、働けるようになる。これはまさに普通の意味での社会開発につながっていく。大変よくわかる話でありながら、でも、これって、日本も迎ってきて、その後、どうなの？ということになった話でもある。学校に行けるようにするというあ

たりが一段落ついた時に、それだけでよかったのかということを考えて、それでもって、そこの中にとりこぼされている人っている、重度の障害者っている、働ける、勉強できるって方向のことだけとはなにか違うんじゃないのっていうことを、日本の場合は45年ぐらい前に体験した。そういうものを、今いわゆる国際支援だとか、開発援助であるとか、そういうものにどうつなげていくのかという、そういうことも考えどころというか、おもしろいところなんじゃないかなというふうに私は今齊藤さんの話を聞いておりました。

会場：今のお話の中にもあったんですけども、まだ政策あるいは制度というのが整っていない状況があるなかで、制度かあるいは政策をつくっていくときにその都度その都度立ち止まって考えるべきことというのが多いのかと感じました。たとえば、西洋的な価値観からの障害施策制度というのだけじゃなしに、現地といいますか、明文化こそされていない仕組みをどう考えるべきでしょうか。

齊藤：最初の入口を作るという時に、モデルというのはすごく大きいのです。アフリカの国々の法制度は、多くは旧宗主国、すなわちヨーロッパの仕組みを真似ています。イギリスに障害者差別禁止法があるので、かつてイギリスが支配していた国々の多くに障害者差別禁止法があったりします。とはいえ、法があっても実効的に活用されているとは言えません。多分二つの課題があるだと思います。一つは、法律がプログラムみたいな感じで、イギリスにできたからやりましょうみたいな感じでつくられちゃうと、国内でも周知されているとは言えないということです。もう一つは、法律を実際に使うには、特に初めてのケースで使えば、心理的に壁があったり、また実際どうやったらいいのかわからないということになりがちです。そうした時、サポートする人が必要なのです。実際に使ってみせて、こういう使い方をしようと呼びかけ、さらには法律を活用しようする人を支援する、といったことが、アフリカの国々の運動の課題となっていると思います。

その意味で、南アフリカの HIV 陽性者運動はモデルとして重要な役割を果たしたと思います。南アの運動が、ケニア、ナイジェリア始めとするアフリカ

諸国の HIV 陽性者たちの自分たちもやろう、という気持ちを奮い立たせました。先進国の運動もモデルだけど、やっぱり同じアフリカの国における運動のもたらすインパクトは大きかったです。また、2003 年 3 月に南アフリカケープタウンで開かれた国際治療体制構築サミットで、アフリカを中心に治療を必要としている人、それに直接関わってこれから動けそうな人というのを 70 人ぐらいが招かれて一緒に話し合ったことも大きかったと思います。日本からは、今一緒に仕事をしている稲場雅紀だけ呼ばれました。顔を付き合わせて一緒に議論をする、イメージを固める、そういった機会も必要です。実は日本でも、こうした一緒に考えてイメージを掴んでいくようなワークショップ的な機会は結構もたれています。運動団体がやるわけですけど、制度の使い方を関係者に知ってもらい制度を活用してもらうために、行政の側が準備して実施することも増えているようです。特に健康の分野です。日本におけるこうした経験は、参照しうるものとしてもっと提示した方がいいと思います。もちろん、それが最終的なツールとして使えるものなのか、実際に役立つのはなにかというのは、国によって違いますので、どこでも役立つわけではありません。それでも、国際協力機関や NGO に任せるきりにするのではなく、政府が、そういう時にこのくらいのことをやるのは当たり前なんだよということを示す機会を作るというのも大きいと思います。

立岩：これ〔PC の画面〕は生存学のホームページなんですけれども、その中でページ内の検索っていうのがあるんです。そこからも行けますし、表紙の「Africa」というところからも行けますが、斉藤さんが、本格的には 2005 年から、ずっとアフリカに関する新聞報道とか量の多いテキストのデータベースを作ってくれていて、この中に入っています。それから、特にアフリカとエイズの問題、HIV のその治療、薬の問題が大きかった時に、2005 年ぐらいから資料集を作って自家製本して、しばらく売っていました。今はワードのファイルだけで提供しています(アフリカ日本協議会・三浦 [2005a] [2005b]、アフリカ日本協議会・立岩編 [2005]、アフリカ日本協議会編 [2007]、立岩・アフリカ日本協議会編 [2007])。もし関心があるのだったら、見てください。

モデルという話でいうと、「アハマット」というので検索してみてください。

ザッキー・アハマット(Zackie Achmat)という男性が出てきます。南アフリカ政府は、長いこと HIV の治療に積極的じゃなかったんです。彼はそれに業を煮やして、薬ハNSTOというのかな、政府が態度変えない限り、薬を飲まないということをやった。もちろん、薬を飲まないと状態は悪化していくわけです。アフリカでそういうことして政府を動かしたんす。僕はけっこう好きです。そういうのも、多分日本人のほぼ全ての人知らない。彼がノーベル賞をとるという話が一時期あって、あの時本当にとっていたら、世の中けっこう変わったと思うところもあります。そういう、知られざる英雄というか、そういう人がいたりするんです。そういうのって、我々にとっても、気持ちというか勇氣というか、そういうのももらえたりする。その人に関わる記録もさきの資料集に入っています。僕らは英雄にはなれないけれども、知らせていくとか、そんな仕事はやってきているというようなことを、ちょっとおまけで付け加えておきます。

会場：アフリカの障害者が仕事をやっているのか、どうか。何もやっていないのか、何か仕事を与えられているのか。アフリカでは、大都市に住んでいる人を別にすれば、おそらく、いろんな仕事を一人で、農業を中心にしておかにもいろいろやっているという生活の仕方をしている場合が多いと思います。その時に、障害者が誰の支援を受けているのか。家族なのか。それとも、部族が助けてくれるのか。また、国が戦争ばかりで機能していないところではどうやって支援にアクセスしたらいいのか。

齊藤：ありがとうございます。先に、アフリカの国々では戦争が相次いでいて支援へのアクセスが大変じゃないかという問いかけについて話します。アフリカで内戦が広がっていたのは、1990年代のことです。1989年のベルリンの壁崩壊、92年にソ連連邦がなくなるという世界的な動きと関連して、アフリカの各地で内戦が起きたのです。2000年代に入って一定の解決を見た国が多くなりましたが、現在でも、ソマリア、コンゴ民主共和国東部、南スーダン、リビアの4カ国ではかなりの規模の戦闘が続いています。また、ソマリアでの内戦の影響で、ケニアやウガンダで爆破事件が起きる、エジプトでも爆破事件や

軍・政府機関への襲撃事件が起きたりしています。しかし、アフリカ全体から見ればかなり限られた国のできごとと言えます。アフリカの国々は、この10年ぐらいで見ると、全体として平均して年7パーセントぐらい経済成長しています。経済成長の主要な源泉は、石油と天然資源です。そして、人口増も大きく寄与しています。人口増の背景には、平和があります。1980年代の終わりまで内戦が続いていたエチオピアでは、内戦が終わった頃の人口は4,000万人に満たないくらいでした。現在では、やがて1億人になると予想されています。30年弱で倍以上になったのです。平和は人口増につながり、経済規模の拡大をもたらします。もっとも、急激な経済拡大に対応するための仕組みづくりは、まだまだこれからの課題です。

アフリカの障害者の暮らしを伝える日本語の資料は多くはありません。今年出版された戸田美佳子著『越境する障害者 アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』は、タイトルのとおり、カメルーンの熱帯林の中で農耕を中心にした生活をしている障害者の生活を詳しく描いています。著者の戸田さんは、アジア経済研究所の調査事業でコンゴ川を横断するフェリーの障害者割引を利用して国境貿易を行っている障害者グループのことを調査し、レポートにまとめています。そういった形で、姿が「見える人たち」には、アクセスしやすいので状況もつかみやすいです。他方、在宅で訪ねて行ったけど家族がかわせてくれない、「うちにはいないよ」と言われている障害者たちのことはよくわかりません。

アフリカ日本協議会の会報「アフリカ NOW」に、福岡の青い芝の会メンバーの脳性マヒ者がタンザニアを訪ねた時の報告を載せたことがあります。脳性マヒ者の車椅子を中心にグループで歩いていたら、どこからともなく手漕ぎ三輪車に乗った障害者たちが3人やってきて、「お前らどうやって食ってんだ」という話になったそうです。「街中にいて1人で物乞いをする。街中でないとそういう機会がなかなかないから、街中へ出る」と語っていたと報告されています。そういった報告も少しありますが、アフリカ諸国の障害者の状況はまだまだわからないことばかりです。今回紹介している CAPEDES メンバーは、割合いいところのおぼっちゃんです。アブディンさんのお兄さんは、全盲ですがハルツーム大学法学部を卒業して弁護士になっています。アブディンさんにして

もお兄さんにしても大学に行っているわけだし、日本から CAPEDS 事務局員の大学生がスーダンに行った時も彼ら家に泊めてもらって、おいしいものを食べさせてもらったそうですなので、いいところのおぼっちゃんだというのは確かです。そういった大学へ行っているような障害者のことは少しわかってきたけれどそうじゃない障害者たちがどうしているのかを調査することは今後の課題です。

CAPEDS の取り組みの一つとして、コーラン学校での取り組みを紹介しました。1,000 人規模のコーラン学校で視覚障害児対象の点字教室をやったという取り組みです。農村部の寄宿舎もある大きなコーラン学校での取り組みです。そういった学校に来ている障害児も、授業料を払えるような家の子ということになると思います。だから、まだまだそこから先の人というのはなかなか見えづらいです。追っかけていかないとわからないというのは確かです。

援助・支援が可能なのかという問いは、政府がきちんとしているかという問いとセットなのだと思います。そういう意味で、就学率を上げる取り組みも含めて、IT 化など教育に力を入れているルワンダ政府が障害児への教育、障害者支援をどう進めていくのか注目していきたいと思います。

会場：レジュメの最初にも HIV 陽性者の当事者運動の話があったが、アフリカの障害者の当事者運動というのは、あるのかどうか。それに関連して、スーダンの話は視覚障害の方の話があったんですけど、肢体不自由の方とか、知的障害を持っている人たちの家族が声を上げて支援を求める動きとかはアフリカではあるのか。もしご存じだったら教えていただきたい。

齊藤：JICA が企画して、DPI 日本会議がやっている研修のことを紹介しました。この研修は DPI のアフリカ・ネットワークがあって可能になったものです。この研修にも参加した、南部アフリカ障害者連合という、南部アフリカ諸国の障害者組織の連合体で長らく代表を務めていたピリさんにジンバブエの障害者の状況について書いてもらって、AJF 会報「アフリカ NOW」に載せたことがあります。ピリさんと一緒に、ボツワナで開かれた TICAD 閣僚級会合に参加した現 AJF 代表理事の津山直子によるピリさん聞き書きも合わせて載せて

います。

そのピリさんのことを知っているマラウィのちょうど僕なんかと同じぐらいの年、もうすぐ60になる脳性マヒ者も3年ほど前、研修に参加して日本へ来ていました。アフリカの国々にはまだポリオの人も多く、しばらく前まで研修を受けに日本に来るような人はわりに軽度の自分で動けている人が多かったのですが、彼は息子さんを介助者として伴って研修に参加していました。

2013年度からヒューマンケア協会が南アフリカで取り組んでいる自立生活センターづくりにつながる人材育成事業のピア・カウンセリング研修で、今年2月に6人の南アフリカの障害者が日本へやってきました。その時の参加者のうち4人は事故による脊髄損傷の人でした。難病の人もいました。

昨日、精神障害者の意志決定支援という研究会を、生存学の企画として京都キャンパスプラザで開催しました(「研究会 精神障害者の意思決定支援 オランダのセルフヘルプの実践」2015年7月24日(金)開催)。この研究会で報告したヨラーン・サンテゴッツさんは、2008年にウガンダで開かれたWNUSP(世界精神医療ユーザー・サバイバーネットワーク)世界大会に参加したそうです。ウガンダで世界大会が開かれたということは、受け入れる組織があり、また世界的に見て最前線としてもっと頑張ってもらいたいという注目が集まっていたのだと思います。10年ぐらい前ですか。2003年ごろブルキナファソという国でピープルファースト(People First)、知恵遅れの人たちの世界大会が開かれました。その時は、このシリーズのトップバッターとして報告した長瀬修さんが参加しています。アフリカと一口では言えないですけど、アフリカの国々にも障害者団体がいくつもあって、活動しているということはわかってもらえたと思います。

立岩：我々が思うよりはいろいろな活動があったり、国際交流みたいなのが実はけっこうあったりします。むしろ、学者の方がさぼっているというか、そんな印象を私は持っています。

会場：インパクトを与える国際情報の紹介というのがありますけれども、これはアフリカのことを言っているのか、世界全体のことを言っているのか具体例

があれば教えていただきたい。

齊藤：アフリカの障害者支援をやろうという時に、どういうことを手がかりにしたらいだろうかとかと問いかけるつもりで提起しました。具体的には、1981年の国際障害者年がアフリカの障害者たちにもインパクトを与えたことを振り返り、なぜどのようにしてインパクトを与えたのかを、改めて考える必要があると思います。また、アフリカ障害者の10年が現在取り組まれています。アフリカ連合(AU)というアフリカの国家連合がなぜこうした取り組みを始めたのか、どのように取り組んでいるのか、AU加盟国はそれぞれに見合う施策をきちんとやっているか、あるいは対策本部みたいなのをちゃんと持っているかについて調べることもインパクトを考えることとなります。2006年に国連障害者の権利条約が作られて、どここの国ではどこまでやったよという情報がアフリカの国々に入ると、障害者団体にとってはたいへんな励みになりました。各国の政府にとっても世界の動きに遅れずにやらなきゃいけない、障害者団体にイニシアティブを握られてはいけない、というようなインパクトがあったと思います。そういう意味でインパクトのある情報を共有していく、機会あるたびに使えるような形で提示する。それをお手伝いするのが重要なと思います。

立岩：ありがとうございました。たとえばこれからアフリカいろんな企画があって、そういったものもできるだけお伝えしたいなと思いますし、ホームページに載せたりしてお知らせしていきたいと思っています。いろいろな形で情報提供できるかと思いますので、そんなふうにも使っていただければいいかなというふうに思います。

今日は参加者数は少なかったですけれども、よいやりとりができて、齊藤さんもだいぶ言いたいこと言った。まだ言いたいことあると思いますけれども、多分きりが無いと思うので、こちらへんで終わらせていただきます。皆様どうもありがとうございました。齊藤さんどうもありがとうございました。

◆関連文献

- アフリカ日本協議会編、2007、『アフリカ諸国での PLWHA の当事者運動、エイズ治療薬の特許権をめぐる国際的な論争 第4部 課題は克服されたのか? 南アフリカの現状報告を読む』〈分配と支援の未来〉刊行委員会
- アフリカ日本協議会・三浦藍編、2005a、『貧しい国々でのエイズ治療実現へのあゆみ——アフリカ諸国での PLWHA の当事者運動、エイズ治療薬の特許権をめぐる国際的な論争 第2部 先進国・途上国をつなぐ PLWHA 自身の声と活動』〈分配と支援の未来〉刊行委員会
- 、2005b、『貧しい国々でのエイズ治療実現へのあゆみ——アフリカ諸国での PLWHA の当事者運動、エイズ治療薬の特許権をめぐる国際的な論争 第3部』〈分配と支援の未来〉刊行委員会
- アフリカ日本協議会・立岩真也編、2005、『貧しい国々でのエイズ治療実現へのあゆみ——アフリカ諸国での PLWHA の当事者運動、エイズ治療薬の特許権をめぐる国際的な論争——第1部 アフリカのエイズ問題』立命館大学大学院先端総合学術研究科立岩研究室
- 立岩真也、2015、「田舎はなくなるまで田舎は生き延びる」天田・渡辺編 [2015: 188-211]
- 立岩真也・アフリカ日本協議会編、2007『運動と国境——2005年前後のエイズ/南アフリカ+国家と越境を巡る覚書 第2版』、Kyoto Books(アフリカ日本協議会編 [2007])の第2版)
- 天田城介・渡辺克典編、2015『大震災の生存学』青弓社
- 新山智基編、2015『アフリカの病・医療・障害の現場から——アフリカセミナー『目の前のアフリカ』での活動を通じて(生存学研究センター報告23)』、立命館大学生存学研究センター